

# 海の使者

泉鏡花

青空文庫



何心なく、背戸の小橋を、向こうの蘆へ渡りかけて、思わず足を留めた。

不図、鳥の鳴音がする。……いかにも優しい、しおらしい声で、きりきり、きりりりり。

その声が、直ぐ耳近に聞こえたが、つい目前の樹の枝や、茄子畑の垣根にした藤

豆の葉蔭ではなく、歩行く足許の低い処。

其処で、立ち佇つて、ちよつと気を注いだ、もう留んで寂りする。——秋の彼岸過ぎ

三時下りの、西日が薄曇つた時であつた。この秋の空ながら、まだ降りそうではない。

桜山の背後に、薄黒い雲は流れたが、玄武寺の峰は浅葱色に晴れ渡つて、石を伐り

出した岩の膚が、中空に蒼白く、底に光を帯びて、月を宿していそうに見えた。

その麓まで見通しの、小橋の彼方は、一面の蘆で、出揃つて早や乱れかかつた穂が、霧

のように群立つて、藁屋を包み森を蔽うて、何物にも目を遮らせず、山々の茅薄と一連

に靡いて、風はないが、さやさやと何処かで秋の暮を囁き合う。

その蘆の根を、折れた葉が網に組み合せた、裏づたいの畦路へ入ろうと思つて、やが

て踏み出す、とまたきりりりと鳴いた。

「なんだろう」

虫ではない、確かに鳥らしく聞こえるが、やっぱり下の方で、どうやら橋杭にでもいるらしかった。

「千鳥かしらん」

いや、磯でもなし、岩はなし、そのの留まりそうな濡標もない。あつたにしても、こう人近く、羽を驚かさぬ理由はない。

汀の蘆に潜むか、と透かしながら、今度は心してもう一步。続いて、がたがたと些と荒く出ると、拍子に掛かって、きりきりきり、きりりりり、と鳴き頻る。

熟と聞きながら、うかうかと早や渡り果てた。

橋は、丸木を削って、三、四本並べたものにすぎぬ。合せ目も中透いて、板も朽ちたり、人通りにはほろほろと崩れて落ちる。形ばかりの竹を縄捌げにした欄干もついた、それも膝までは高くないのが、往き還り何時もぐらぐらと動く。橋杭ももう痩せて——潮入りの小川の、なだらかにのんびりと薄墨色して、瀬は愚か、流れるほどは揺れもしないのに、水に映る影は弱って、倒に宿る蘆の葉とともに蹠踉する。

が、いかに朽ちたればと行って、立樹の洞でないものを、橋杭に鳥は棲むまい。馬の尾に巣くう鼠はありと聞けど。

「どうも橋らしい」

もう一度、試みに踏み直して、橋の袂へ乗り返すと、跫音とともに、忽ち鳴き出す。

(きりきりきり、きりりりりり……)

あまり爪尖に響いたので、はつと思つて浮足で飛び退つた。その時は、雛の鶯を蹂み躪つたようにも思つた、傷々しいばかり可憐な声かな。

確かに今乗つた下らしいから、また葉を分けて……ちようど二、三日前、激しく雨水の落とした後の、汀が崩れて、草の根のまだ白い泥土の欠目から、楔の弛んだ、洪水の引いた天井裏見るような、横木と橋板との暗い中を見たが何もおらぬ。……顔を倒にして、捻じ向いて覗いたが、ト真赤な蟹が、ざわざわと動いたばかり。やどかりはうようよ数珠形に、其処ら暗い処に蠢いたが、声のありそうなものは形もなかった。

手を払つて、

「ははあ、岡沙魚が鳴くんだ」

と独りで笑つた。

## 中

虎沙魚とらほげ、衣沙魚ころもほげ、ダボ沙魚はげも名にあるが、岡沙魚おかほげと言うのがあろうか、あつても鳴くかどうか、覚束おぼつかない。

けれどもその時、ただ何なんとなくそう思った。

久あとしい後りちようで、その頃やげんぼり葉研堀えいたいにいた友だちと二人で、木場きばから八幡様はちまんさまへ詣まいつて、汐しおい入り町ちようを土手どてへ出て、永代えいたいへ引ひつ返かえしたことがある。それも秋で、土手を通とつたのは黄昏たそがれどき時、果たてしのない一面いっぺんの蘆原あしはらは、ただ見る水みづのない雲うみで、対方むこうは雲うみのない海である。路みちには処ところ々ところ々、葉はの落おちちた雑樹ぞうきが、乏とほしい粗朶そだのごとく疎まばらに散ちらかつて見えた。

「こういう時とき、こんな処ところへは岡沙魚おかほげというののが出て遊ぶあそぶ」  
と渠かれは言いつた。

「岡沙魚おかほげつてなんだろう」と私わたしが聞きいた。

「陸おかに棲すむ沙魚さぎなんです。蘆あしの根ねから這はい上あがって、其そこ処ところらへ樹上きのぼりをする……性しやうが魚うおだからね、あまり高たかくは不可いけません。猫ねこ柳やなぎの枝えだなぞに、ちよんと留とまとまとつて澄すまましている。

人の聲あしおと音がするとね、ひっそりと、飛んで隠かくれるんです……この土手の名物だよ。……  
劫こうの経やった奴は鳴くとさ」

「なんだか化ばけそうだね」

「いずれ怪けし性のものですよ。ちよいと気味の悪いものだよ」

で、なんとなく、お伽とぎ話を聞きくようで、黄たそ昏がれのものの気勢けいせいが胸むねに染しみだ。——なるほど、そんなものも居いそうに思おもって、ほぼその色も、黒の処いへ黄味きみがかって、ヒヤリとしたものらしく考かんえた。

後あとで拵こしらえ言ごと、と分わかったが、何故なぜか、ありそうにも思おもわれる。

それが鳴なく……と独ひとりで可お笑かしい。

もう、一度、今度は両手に両側の蘆あしを取とって、ぶら下ぶらるようにして、橋の片端ひょうしを拍ひ子うしに掛かけて、トンと遣やる、キイと鳴る、トントン、きりりと鳴く。

(きりりりり、

きり、から、きい、から、

きりりりり、きいから、きいから、)

くれない  
紅べにの綱ひで曳ひく、玉たまの轆轤ろくろが、黄金こがねの井いの底そこに響ひびく音ね。

「ああ、橋板が、きしむんだ。削つたら、名器の琴になろうもしれぬ」  
そこで、欄干を掻い擦つた、この楽器に別れて、散策の畦を行く。

と蘆の中に池……というが、やがて十坪ばかりの窪地がある。汐が上げて来た時ばかり、水を湛えて、真水には干て了う。池の周囲はおどろおどろと蘆の葉が大童で、真中所、河童の皿にぴちやぴちやと水を溜めて、其処を、干潟に取り残された小魚の泳ぐのが不断であるから、村の小児が袖を結つて水悪戯に掻き廻す。……やどかりも、うようよいる。が、真夏などは暫時の汐の絶間にも乾き果てる、壁のように固まり着いて、稲妻の亀裂が入る。さつと一汐、田越川へ上げて来ると、じゆうと水が染みて、その破れ目にぶつぶつ泡立つて、やがて、満々と水を湛える。

汐が入ると、さて、さすがに濡れずには越せないから、此処にも一つ、——以前の橋とは間十間とは隔たらぬに、また橋を渡してある。これはまた、纒かに板を持って来て、投げたにすぎぬ。池のつづまる、この板を置いた切れ口は、ものの五歩はない。水は川から灌いで、橋を抜ける、と土手形の畦に沿って、蘆の根へ染み込むように、何処となく隠れて、田の畦へと落ちて行く。

今、汐時で、薄く一面に水がかかっていた。が、水よりは蘆の葉の影が濃かった。

今日は、無意味では此処ここが渡れぬ、後の橋あとが鳴ったから。待て、これは唄うたおうもしれない。

と踏み掛けて、二足ふたあしばかり、板なかの半ばで、立ち停どまったが、何なんにも聞こえぬ。固もとより聞

こうとしたほどもなしに、何となく夕暮ゆふぐの静かな水の音が身に染みる。

岩端いわばなや、ここにも一人、と、納涼台すずみだいに掛けたように、其処そこに居て、さして来る汐しほを

下

水の面おもとすれすれに、むらむらと動くものあり。何か影なにかのように浮いて行く。……はじめは蘆あしの葉はに縫すがった蟹かにが映うつって、流ながる水みづに漾ただようのであろう、と見たが、あらず、然さも心あるもののごとく、橋はしに沿したがうて行ゆきつ戻かえりつする。さしたての潮しほが澄すんでいるから差さし覗のぞくとよく分わかった——幼おさなご児こごしの拳こぶしほどで、ふわふわと泡あわを束つかねた形かたち。取り留とどめのなさは、ちぎれ雲うすかばが大空おおぞらから影かげを落おとしたか、と視みめられ、ぬべりとして、ふうわり軽い。全体ぜんたいが薄うす樺かばで、黄色きいろい斑ふちがむらむらして、流れのままに出でたり、消きえたり、結むすんだり、解とけ

たり、どんよりと濁肉にごりじしの、半ば、水なりに透き通るのは、是これなん、別のものではない、  
とらまだら  
虎斑くわらげの海月である。

生しょうある一物いちもつ、不思議はないが、いや、快く戯たわむれる。自在に動く。……が、底ともなく、  
中なかほどともなく、上面うわつらともなく、一ひとすじ条、流れの薄衣うすぎぬを被かいで、ふらふら、ふらふら、  
……斜はすに伸びて流るるかと思えば、むっくり真直に頭づを立てる、と見ると横になつて、す  
いと通る。

時に、他ほかに浮んだものはなんにもない。

この池を独り占じめ、得意の体ていで、目も耳もない所せ為か、熟じつと視める人の顔の映つた上を、  
ふい、と勝手に泳いで通る、通る、と引き返してまた横切る。

それがまた思うばかりではなかつた。実際、其処しよがに踞しゃがんだ、胸の幅はば、唯ただ一尺ばかりの  
間あいだを、故わざとらしく泳ぎ廻まわつて、これ見よがしの、ぬっぺらぼう！  
憎にくい気がする。

と膝ひざを割つて衝つと手を突ツ込む、と水がさらさらと腕かひなに搦からんで、一いち来法師らいほうし、さしつら  
りで、ついと退ひいた、影も溜たまらず。腕を伸ばしても届かぬ向こうで、くるりと廻くわる風して、  
澄ましてまた泳ぐ。

「此奴」

と思わず呟いて苦笑した。

「待てよ」

獲物を、と立って橋の詰へ寄って行く、とふわふわと着いて来て、板と蘆の根の行き逢った隅へ、足近く、ついと来たが、蟹の穴か、蘆の根か、ぶくぶく白泡が立ったのを、ひよい、と気なしに被つたらしい。

ふツ、と言いそうなその容体。泡を払うがごとく、むくりと浮いて出た。

その内、一本根から断つて、逆手に取つたが、くなくなした奴、胴中を巻いて水分かれをさして遣れ。

で、密と離れた処から突ツ込んで、横寄せに、そろりと寄せて、這奴が夢中で泳ぐ処を、すいと掻きあげると、つるりと懸かつた。

蓴菜が搦んだようにみえたが、上へ引く掣とともに、つるつると這つて、もう何にもなかつた。

「鮫の燐火、退散だ」

それみろ、と何か早や、勝ち誇つた気構えして、蘆の穂を頬摺りに、と弓杖をついた

処は可かつたが、同時に目の着く潮のさし口。

川から、さらさらと押して来る、蘆の根の、約二間ばかりの切れ目の真中。橋と正面に向き合う処に、くるくると渦を巻いて、坊主め、色も濃く赫と赤らんで見えるまで、躍り上がる勢いで、むくむく浮き上がった。

ああ、人間に恐れをなして、其処から、川筋を乗って海へ落ち行くよ、と思う、と違う。しばらく同じ処に影を練って、浮いつ沈みつしていたが、やがて、すすい、横泳ぎで、しかし用心深そうな態度で、蘆の根づたいに大廻りに、ひらひらと引き返す。

穂は白く、葉の中に暗くなって、黄昏の色は、うらがれかかった草の葉末に敷き詰め

た。  
海月に黒い影が添って、水を捌く輪が大きくなる。

そして動くに連れて、潮はしだいに増すようである。水の面が、水の面が、脈を打って、ずんずん拡がる。嵩増す潮は、さし口を挟んで、川べりの蘆の根を揺すぶる、……ゆらゆら揺すぶる。一揺り揺れて、ざわざわと動くごとに、池は底から浮き上がるものに見えて、しだいに水は増して来た。映る影は人も橋も深く沈んだ。早や、これでは、玄武寺を倒に投げうっても、峰は水底に支えまい。

蘆のまわりに、円く拡がり、大洋の潮を取って、穂先に滝津瀬、水筋の高くなり行く川面から灌ぎ込むのが、一揉み揉んで、どうと落ちる……一方口のはけ路なれば、橋の下は颯々と瀬になつて、畦に突き当たつて渦を巻くと、其処の蘆は、裏を乱して、ぐるぐると舞うに連れて、穂綿が、はらはらと薄暮あいを蒼く飛んだ。

(さつ、さつ、さつ、)

しゅつ、しゅつ、しゅつ、

エイさ、エイさ！)

と矢声を懸けて、潮を射て駈けるがごとく、水の声が聞きなされる。と見ると、竜宮の松火を灯したように、彼の身体がどんよりと光を放つた。

白い炎が、影もなく橋にびたりと寄せた時、水が穂に被るばかりに見えた。

びたびたと板が鳴つて、足がぐらぐらとしたので私は飛び退いた。土に下りると、はや其処に水があつた。

橋がだぶりと動いた、と思うと、海月は、むくむくと泳ぎ上がった。水はしだいに溢れて、光物は衝々と尾を曳く。

この動物は、風の腥い夜に、空を飛んで人を襲うと聞いた……暴風雨の沖には、海坊

主ずにも化ばけるであらう。

逢魔おうまケ時ときを、慌あわただしく引き返して、旧もと来た橋へ乗る、と、

(きりりりり)

と鳴った。この橋はやや高いから、船に乗った心地こころちして、まず意こころを安んじたが、振り返ると、もうこれも袂たもとまで潮しほが来て、海月はひたひたと詰め寄せた。が、さすがに、ぶくぶくと其処で留った、そして、泡が呼吸いきをするような仇あだひかり光ひかりで、

(さつさつさつ)

しゅっしゅっ、

さつ、さつ！)

と曳えい々えい声こゑで、水を押上げようと努力つとむる気勢けはい。

玄武寺げんむじの頂たかねなる砥とのごとき巖いわの面おもへ、月影さつが颯さつとさした。――

# 青空文庫情報

底本：「高野聖」集英社文庫、集英社

1992（平成4）年12月20日第1刷発行

1993（平成5）年6月5日第2刷発行

初出：「文章世界」

1909（明治42）年7月

※修正箇所は「鏡花全集 卷十二」（岩波書店、1942）を参照しました。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2008年12月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 海の使者

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>